[dõ:k]

DONC どんく

N°88 mai 2010 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

発 行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059－226－2766
FAX 059－229－0967

7月11日 三重日仏協会2010年度総会と「パリ祭」

記念講演に坂本成彦氏（奈良日仏協会会長 元奈良交通社長・津市出身）

今年度の定期総会と記念講演、「パリ祭」パーティーを下記のように開催します。総会議事以外は一般公開といたしますので、お誘い会わせて多数ご参加下さい

◇日 時 7月11日（日曜日） 15:00 定期総会
15:30 記念講演 坂本 成彦氏 （入場無料）
17:00 **「パリ祭」パーティー** （会費6,000円）

◇場 所 津都ホテル（津市大門・tel 059-228-1111）

＜記念講演＞「わたしとフランス」

坂本成彦さんは1940年津市のご出身で、大阪大学から近畿日本鉄道に入社、常務取締役、奈良交通社長を経て、現在奈良日仏協会会長。1971年にはフランス政府給費留学生として１年間在仏され、仏国鉄（ＳＮＣＦ）や国際鉄道連合（ＵＩＣ）などで研修されました。今回は、フランスにかかわられた動機、40年前のフランスでの生活などについてお話しいただきます。

「パリ祭」パーティー 今年も７月14日のFête Nationale「フランス国民の祭日」に因んで恒例の楽しいパーティーを開きます。お里帰りの坂本さんを囲んでの懇談、三重日仏風ビンゴやトンボラ（福引）などの余興のほか、今年は鈴鹿市のジャズライブハウス「ミカハウス」の本居美佳さんによるピアノ演奏で雰囲気を盛り上げていただきます。

6/2 フランス大使主催「全国日仏協会の集い」

フィリップ・フォール駐日フランス大使より本会・内田会長夫妻ほかに対し、６月２日午後大使公邸で開催される「全国日仏協会の集い」への招待をいただいております。「全国の集い」は前回の2007年秋から２年半ぶりに開かれるものです。

会員の随想

《川喜田半泥子とパリ》

龍泉寺　由　佳

自画像

来る６月８日より三重県立美術館において、「川喜田半泥子のすべて」展が開催されます。陶芸作品を中心に、出展が230件を超える過去最大の回顧展です。同展は昨秋より岐阜、東京、横浜、萩と巡回し、13万人以上の観覧者を迎えました。地元三重が最終会場となります。

私が学芸員として勤務する石水博物館は、川喜田半泥子（1878～1963）が1930（昭和５）年に設立した「財団法人石水会館」をベースとし、1975（昭和50）年より登録博物館として活動してきました。川喜田家代々の蒐集品や歴史資料とともに、半泥子作品や関連資料を多数所蔵し、保存・公開しています。

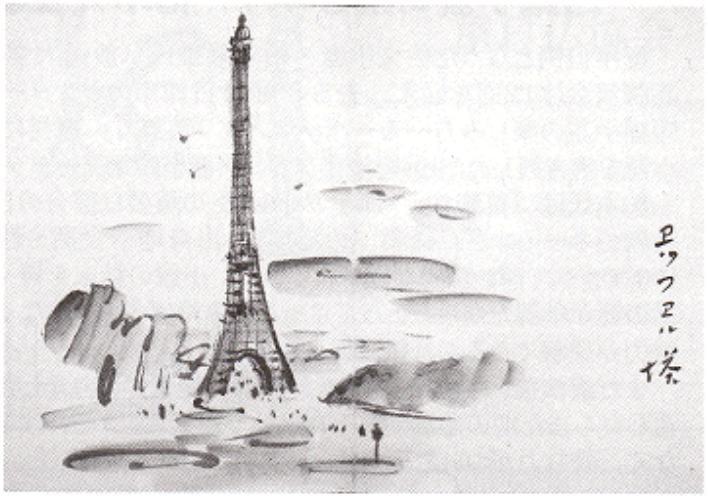
近代を代表する陶芸家として全国的に知られ、３万点以上の作品をのこしたと言われる半泥子ですが、陶芸は趣味のひとつで、生涯「・・・・シロート」に徹しました。「東の魯山人、西の半泥子」「昭和の光悦」などと称されています。

本名は久太夫政令。川喜田家は津に本拠を置き、寛永年間（1620年代）より江戸大伝馬町に大店を構え、木綿問屋を営んでいた伊勢商人屈指の豪商でした。半泥子は１歳で家督を相続、十六代川喜田久太夫を襲名しました。「半泥子」の号は禅の師の勧めによるものです。「半ば泥みて、半ば泥まず」、物事に没頭し泥んこになっても、半面で冷静に己をみつめられる、という意味があります。

本業はあくまでも実業家。商家の当主のほか、百五銀行第六代頭取など数々の企業の要職を務める多忙な生活を送りました。その一方、茶の湯、洋画、日本画、書、俳句、写真、建築など多彩な趣味を持ち、風雅の世界に遊びました。中でも陶芸は「破格」と評され、その作風は「豪放磊落、おおらかで伸びやか」と形容されます。また、自らつける作品の銘や書画には、豊富な知識と経験に裏付けされたウィットとユーモアが溢れています。その作品群を通観すれば、半泥子の天性のセンスと豊かな人間性が見えてきます。

さて、好奇心旺盛な半泥子は、大正時代より何度か海外旅行に出かけ、見聞を広めています。1923（大正12）年には長男・壮太郎を伴い、欧米旅行をしました。３月20日に横浜を出航、ハワイ、アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、ドイツ、スイス、イタリア、エジプトなどを回遊し、９月１日（関東大震災の日）に神戸に帰港するという、約半年の長旅でした。

前半はトーマスクック社のツアーに参加。旅行団の中には度会郡田丸村の医師でオブラートの発明者・小林政太郎（1872～1947）らもいました。この旅の様子は日記形式の紀行文『欧米漫遊 赤毛布（あかげっと）』に詳しく記されていますので、掻い摘んで紹介します。


「洋行スケッチ帖」から「エッフェル塔」

この旅行中、半泥子はパリに３回立ち寄っています。１度目はオペラ座近くのGrand Hotelに５日間滞在。オペラ「Rigoletto」を鑑賞、凱旋門、エッフェル塔、ベルサイユ、美術館など、今と変わらない名所観光を一通り済ませた後、マチスの絵画を購入しています。タイトルは「Femme au Fauteuil Jaune」、Dix Mille Francsで購入した領収書も残っています。サロンでは「日本人藤田某の画が場内を威圧するかに見へた」と喜んでいます。当時パリで活躍していた藤田嗣治の作品でしょう。また「日本趣味の画が流行しているらしゐ」ともあり、美術史上の時代背景もリアルに伝えています。メトロやバスにも乗り、カフェに行ったり、夜にはダンスを観たりと、パリを堪能したようです。

２度目はHotel Montfleuriに１週間滞在。ボナールとドンゲンの絵画をそれぞれ15,000Ｆ、5,000Ｆで求め、前に購入したマチスとともに、日本へ送る手続きをしています。またフランス語を覚えようとした形跡もあります。「シー（コレデス）、スラー（ソレ）、〈中略〉コンビアン（イクラカ）、ジュップ（ホシイ）、ジュニュブッパ（イラヌ）、メルシー（アリガトウ）、ムッシュ（君ニ）、マダーム（女ニ用ユ）、シルボブレー（ドウゾ）、ボンジュモッシュー（おはよふ）、ボンニー（お寝み・夜ニ限りサヨナラ）、アントレー（お入り）」（原文通り表記）など基本的な単語と数字の発音が記されているほか、多少の俗語も教わったようです。

３度目もHotel Montfleuriに6日間滞在。記念撮影をし、ブローニュの森を散策。土産に香水や石鹸などを購入し、パリを案内してくれた現地の日本人と別れを惜しみつつ、マルセイユに向けて出発しています。

この欧米旅行の様子が描かれた15冊にも及ぶ「洋行スケッチ帖」は、「半泥子のすべて」展で展示されます。また三重展に限り、半泥子がパリで購入してきたマチス、ボナール、ドンゲンの絵画も特別出品される予定です。

ぜひこの機会に展覧会をご観覧いただき、陶芸作品だけでなく、大正時代に半泥子が体感したパリもお楽しみいただければ幸いです。

☆「川喜田半泥子のすべて」展 ＝ 場所：三重県立美術館（津市大谷町11）
会期：６月８日（火）～７月25日（日）　休館日：月曜　TEL：059-227-2100

◆ストーリーは単純でも全編に興味深い「仕掛け」短編小説の楽しみ方　柏木先生講演

毎年恒例となった仏文学者・柏木隆雄氏（放送大学大阪センター所長・松阪市出身）による文芸講演会は12回を迎え、去る３月21日津市のセンターパレス会議室で開催されました。今回は＜短編小説の楽しみ方―モーパッサンの『首飾り』題材に―＞と題して、短い生涯に約300編の短編小説を書き残した19世紀後半フランスの小説家モーパッサンの有名な作品を中心に話されました。

柏木氏は『首飾り』＜La Parure＞の重要な部分の日仏対訳プリントを準備されたうえで、登場人物のネーミング、職業（の細部）、出身地、会話や性格の描写、さらに彼らが歩くパリの街の名にまですべて深い意味が隠されていて、小説の結末を導く大切な仕掛けになっていることを解明され、話の筋が単純だからといってさっと読み飛ばすのではなく、じっくり一語一語読み込んでこそ短編の魅力が理解できることを強調されました。

また講演後、会場から次々と質問や発言がありましたが、「『首飾り』も何年も経ってから読み直したらまた別の感動がある」という聴衆に、「それは単に年齢や人生経験を重ねたというだけではなく、読む力がついた証ではないか」と答えられました。

（予告）10/2　アテフ・ハリム　ヴァイオリンリサイタル（後援事業）＜Parfum de France＞フランスの香り

2009年春、三重県での初めての演奏で聴衆に強烈な印象を残したヴァイオリニスト、アテフ・ハリムさんがこの秋再び津市で下記のようなリサイタルを開きます。アテフさんはエジプト生まれのフランス人で、若くしてフランス国立管弦楽団のコンサートマスターを務めた経歴の持ち主、今回は表題のようにフランスの名曲の数々を演奏します。

アテフ・ハリムさんは演奏会終了後、日仏協会のメンバーたちとのにぎやかな交流を望んでおられるそうです。

日　時：10月２日（土）14時開演
会　場：津リージョンプラザお城ホール
入場料：（全自由席）一般　前売り ３，５００円（当日 ４，０００円）
　　学生　前売り １，５００円（当日 ２，０００円）
曲　目：ルクレール　Ｖソナタ第３番　　ショーソン「詩曲」
　　ドビュッシー「月の光」「亜麻色の髪の乙女」　サンサーンス「死の舞踏」ほか

「川喜田半泥子のすべて」展

６月８日（火）～７月25日（日）　三重県立美術館

粉引茶碗　銘「雪の曙」

「洋行スケッチ帖」から「ある夜の巴里」